Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-06

幕末勤皇歌研究と時局

田中，康二

(Citation)
神戸大学文学部紀要,39:1-41

(Issue Date)
2012-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008293

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008293

幕末勤皇歌研究と時局

田中康二

一、はじめに

一九三〇年代における「転向」体験は、共産主義者や社会主義者が治安維持法の施行による思想弾圧等より、自らの思想・心情を放棄し、政治的あるいは思想的立場を変えることをいう。それは戦争による海外進出や植民地化といった、外国との政治的交わりとその挫折ということに起因するものであり、それまでの日本が経験することがなかった種類のものである。それは近代の帝国という枠組みでは政治的経験であるが、「転向」を体験した者にしてみれば、極めて文化的な体験であると言ってよい。「転向」を帰属する組織からの離脱と定義づけるのであれば、それは極めて個人的な体験である。レッド・オア・デッドと言われるように、帰属する集団におけるアイデンティティーを失えば、それでもなお生き続ける意味があるのかどうかを探し始めなければならない。

このように定義される「転向」について、その時代背景から切り離して意味を広く取ってみよう。たとえば、宗教

の教義上の理由からではなく、人間関係や地縁などの現実的理由から宗派を変更することを「宗旨替え」と称する。また、従来からの主義や主張を変えることを「変節」と呼ぶ。宗旨替えや変節も広義の転向と見なせば、より広い視野から一九三〇年代の転向を位置付けることができるだろう。

そこで本稿では、幕末に活動した勤皇歌人の詠んだ和歌についての論が昭和十年代になって盛んに繰り広げられるようになった経緯をたどることによって、幕末という政治的な季節と時局との関わりの必然的な相関性について言及し、さらに幕末勤皇歌論の出現と消滅が思想的変節であり、文化的変節でもあったことを検証したい。(注一)

二、和歌史上の幕末勤皇歌

近年、近世における和歌文学を対象とする研究は活況を呈していると言ってよい。とりわけ近世前期から中期にかけての堂上歌壇の解明については画期的な成果が出されている。もちろん以前から研究の積み重ねがあった近世中後期の地下歌人、あるいは国学者歌人についての研究はますます盛んになりつつある。そういった経緯の中で、いまだ研究が進んでいないのが幕末和歌の研究である。

かつては幕末和歌といえば、良寛・橘曙覧・大隈言道といった歌人をその代表とする考え方が主流であったが、最近はそれに疑問を呈する動きが主流になりつつある。というのも、それらの三人は近代を先取りする表現をいち早く和歌に取り込んだことにより、高い評価を得たのであろうが、彼らの生前にはほぼ無名に近い存在であった。有り体に言ってしまえば、近代になって発見された歌人なのである。同時代において無名の歌人を、その時代を代表する歌

人と称することに抵抗があるわけである。そういった批判に対して、同時代に支持を受けていた歌人を真の代表歌人と呼ぶことを提唱する動きがある。[注2] そういった研究はこれまで知られていなかった資料や、知られていたけれども活用されていなかった資料を駆使して同時代的状況を復元することによって、精緻でしかもダイナミズムに富む歌人像を浮き彫りにすることができるであろう。

むろん、そのような未開拓資料の発掘に基づく文学史の書き替えは非常に意味のあることであり、今後も文学研究の基盤となっていくことであろう。稿者も及ばずながら同時代的視点から文学を研究する視座を持って取り組んできたつもりである。[注3] しかしながら、一方で過去に存在した資料のすべてを集成することは不可能であり、たとえそれができたとしても、それを原寸大のまま提示することが意味のあることかどうか、即答できる種類の問題ではない。ある程度は編集という名の取捨選択を経なければ、利用可能な資料には成り得ないからである。

観点というものがなければ歴史学はありえないとするカール・ポパーの歴史哲学や、すべての歴史は現代史であるとするベニデット・クローチェの歴史観に拠るまでもなく、歴史はかつて存在したすべての文物の中から、歴史家が現代の眼によって選択し、再構成した構築物である。たとえなまの原資料を残らず集成したとしても、それが歴史ではない。それは単なる史料の集積に過ぎない。むしろそれらの中から何を選択するかという点が肝要であり、そこにこそ歴史を構築する意味が存在するのである。

そういった点から幕末和歌を眺めた時に焦点を結ぶイメージは、必ずしもくっきりとした縁取りのある像ではない。はじめに挙げた良寛・曙覧・言道というのは数量的に見てもいかにも貧相である。もう少し和歌表現の特徴や歌人の傾向、あるいは時代との関わり等の要素をバランスよく配合した観点はないものだろうか。

そこで本稿では勤皇歌という視角から幕末和歌史を考えてみたい。そもそも、幕末の勤皇歌については、同時代に編纂された作品が多数あり、出版されたことも一再ではなかった。その代表的なものとして『歎涕和歌集』と『殉難全集』がある。『歎涕和歌集』は土佐の宮地維宣の編集および同人の蔵版により刊行されたもので、初篇・二篇は慶応四年（一九六八）正月の刊、三篇・四篇は明治二年（一九六九）正月の刊である。俳諧や漢詩も若干含まれているが、収録された詩歌の大半は短歌であり、全四篇で三九三首に及ぶ。一方、『殉難全集』は西本願寺寺侍であった西村兼文の編集にかかるもので、『殉難前草』・『殉難後草』・『殉難遺草』・『殉難続草』の四冊からなる。『前草』と『後草』は慶応四年四月の刊、『遺草』は明治二年四月の刊、『続草』は明治二年六月の刊である。刊行は京都の書肆藤井文正堂によるものと編者蔵版とが混在している。これらの集は志士の文業が散佚することを恐れた業績であり、志士の偉業を後世に残そうとする意図が見出せる。だが、そのような労作を作らせたのは、偉業に対する畏敬や悲哀に対する同情であって、必ずしも文学作品として後世に伝えようとする意思は看取できない。ましてや文学史上に位置付けようとする思考は全くないと言ってよい。

ところが、戦時下における幕末志士の詩歌研究には、そのような同時代的な受容様式とは根本的に異なる作意を読み取ることができる。志士研究は現れるべくして現れたのである。では、その理由は何か。志士研究が現れる背景には何があったのか。そのことを明らかにすることができれば、戦時下の思想状況を解明する手掛かりが得られるのではないか。

以上のことを前提として、本稿では昭和十年代における幕末勤皇歌研究流行の実態を明らかにすることによって、文学研究と時局との関わりを論じ、さらには戦後における顛末にも論及したい。

三、川田順の愛国歌研究

昭和十年代には幕末勤皇歌についての研究が盛んに行われた。もちろん、明治維新が還暦を迎える昭和初年代から徐々にその機運が盛り上がって来ていたが、それが本格化するためには外国との関係が一触即発の局面を迎える必要があった。逆に言えば、幕末とのアナロジーによって時局を乗り切ろうとする意思が日本全国を覆ったのである。そういった時期に、愛国歌研究という切り口で幕末勤皇歌研究に名乗りを上げたのが川田順だった。

川田順は一八八二年に東京に生まれ、東京帝国大学法学部を卒業後に住友本社に就職し、実業家として成功を収める一方で、佐佐木信綱に入門して歌を詠み始めた。詠歌だけでなく、新古今集および新古今歌人の研究においても業績を上げた。一九三〇年には常務理事に就任し、三六年には住友総帥の座が約束されていたが、自己都合により退職した。川田が愛国歌研究に没頭するのは退職後のことである。

川田が愛国歌研究の第一弾として発表したのが『吉野朝の悲歌』（養徳社、一九三八年二月）である。同書は南北朝時代の歌人の伝記と代表歌の注釈からなる著作で、三部作により構成される。緒言は次のような文言で始まる。

皇国の興廃を決する大事が、私等の眼前に展開しつつある。忠勇なる皇軍の将兵等は、人間業と思はれぬ努力を致して、支那南北の山野に尊き鮮血を流しつつある。一布衣に過ぎぬ私といへども、自己に即した歌のみを作り、自己に即した文章のみを発表してゐては、国民の一員として相すまぬと考へた。私如き者の禿筆によつて文章報国が出来ようものとは自負しないけれども、此の秋、適切なる題目に向つて一心を凝集したならば、日本民族の伝統的精神を昂揚する上に、大海一滴底の供物には成り得ようと考へた。かうして、着手した仕事は、吉野

朝廷の君臣が血を吐く如き倭歌の粋を抜いて、それらへの解説及び感想を述べた小著を公にする事であつた。自著を上梓する理由を説明している。それはこの時節にあたって、自己の嗜好する歌や関心に即した文章だけでは駄目だというのである。「文章報国」こそが自分のなすべき事柄であって、吉野朝の歌を解説することがそれに当たるという。「皇国の興廃を決する大事」が展開する「此の秋」とは、言うまでもなく日中戦争（支那事変）のことである。この緒言に先立って記された「吉野朝を憶ふ―序に代へて」は一九三七年菊花節（九月九日）の識語を持っている。同年七月七日の盧溝橋事件を発端に、日中両軍が戦火を交えていた。まさに時局に照応した著述なのである。(注4)

『吉野朝の悲歌』はその後も書き継がれ、『定本吉野朝の悲歌』として一九三九年九月に刊行される。そこには先の引用の後に、次のような文章を続けている。

さうして、約一箇年半を費して三部作を完成した。「吉野朝の悲歌」は第一期作戦の長城戦及び上海戦の最中に書かれ、「宗良親王」は第二期作戦なる徐州包囲戦の前後に書かれ、「吉野朝の悲歌・続篇」は第三期作戦武漢攻略の前駆なる潜山激戦の行はれた頃に執筆を開始したものである。皇軍の驥尾に付して吉野朝の精神史を研究させていただいた事を、深く感謝せねばならぬ。

『吉野朝の悲歌』は日中戦争が始まったことをきっかけに書き始められたが、第一部から第三部に至るまで、すべてその戦局の進展とともに書き継がれたというのである。つまり、「吉野朝の精神史」を研究することは、川田にとって前線で鮮血を流す皇軍に対して銃後の護りという認識であった。こうして川田の愛国歌研究が始まった。

川田順が愛国歌研究の第二弾『幕末愛国歌』（第一書房、一九三九年六月）を執筆するのは、『吉野朝の悲歌』三部作を擱筆した直後である。一九三九年五月の識語を有する序は、次の文章から始まる。

吉野朝の悲歌と幕末の志士吟とは、過去に於ける愛国歌の二大集団と愚考する。既に前者の研究を終結した私は、当然の欲求として、後者の検討に着手した。約一百日後、辛うじて体裁を成したのが此の小冊である。

『吉野朝の悲歌』と『幕末愛国歌』とは「愛国歌」研究の上で連作であり、テーマとして完全に連続性を持つ著作だという。つまり、川田順の認識では、吉野朝と幕末とは「愛国歌」が数多く詠まれた時代として刻印されている。このような認識がはじめから川田の中にあったのか、それとも注釈研究の過程で芽生えたのかは必ずしも定かではない。しかしながら、川田の愛国歌観は、あたかも愛国歌研究の業績に比例するかのごとく、年を追うごとに広がりと深まりを見せる。愛国歌観が通史的に語られるようになるのは、川田が単独で愛国歌を集成して『愛国百人一首』（朝日新聞社、一九四一年八月）を刊行した頃のことである。川田は「序」において、自らの愛国歌研究を総括して次のように述べている。

現下の国状に於いて、歌人も街頭に立たねばならぬ。私も、不及ながら、支那事変勃発と同時に、街頭に出ることを覚悟した。『吉野朝の悲歌』や『幕末愛国歌』や『国初聖蹟歌』などを公にしたのも、単に文学としての文学の意味でなく、現下の国民精神にいさゝかでも寄与せねばならぬと考へた故であつた。かうして既に街頭に歩み出したのだ。今回更に『愛国百人一首』の出版によつて数歩を進めることは、私にとつて当然の態度であらねばならぬ。

『吉野朝の悲歌』に始まる愛国歌研究は『幕末愛国歌』を経て『国初聖蹟歌』に至って、時局に連動していることが明確になる。『国初聖蹟歌』（甲鳥書林、一九四一年三月）は必ずしも古歌の研究書に連なる作品ではない。紀元二千六百年に際して出版された歌文集なのである。肇国聖蹟巡拝歌（一一一首）・神武天皇聖蹟歌（一三五首）という詠

歌と、肇国聖蹟巡拝記・建国聖蹟巡礼記・神武天皇紀を捧読して・神武天皇聖蹟歌に就いて、という文章とから成る。巻末文には、次のように述べている。

私は若い時分から日本国史に浅からぬ関心を持ち、支那事変勃発以後は国史を題案とした短歌を数多作るやうになつた。それは、非常時下に於ける歌人としての奉公の一つであると確信したが故であつた。

「非常時下」においては「国史を題案とした短歌」を作ることが「奉公の一つ」だという認識を披瀝している。愛国歌を研究することと愛国歌を詠むことは表裏一体のことだったのである。そして、それは川田にとって「街頭に歩み出」すことであった。つまり、歌人としての専門と時局を結び付けるものが愛国歌研究だったのであり、日中戦争（支那事変）勃発以来、一貫してその方向に進み出したのである。『愛国百人一首』はその方向への歩みをさらに数歩進めるものだったと明確に述べているのである。

同書には付録として「愛国歌概説」を添えている。そこには、有史以来の愛国歌を通覧して、次のような愛国歌の歴史を披露しているのである。

凡そ和歌発生以来、いつの時代にも愛国歌は作られたに相違ない。国民に愛国心の儼存する以上、事に即き折に触れてさやうの歌が詠まれるのは当然だ。乍併、古今を通観して、愛国歌の質量共に最も著明なるは、左に列挙する五つの時代と愚考する。左の各時代に於いて、愛国歌は集団的に現はれたのであつた。

一、万葉集時代
二、吉野朝時代
三、幕末時代

四、日清日露両戦役時代

五、支那事変下の現在

これらの時代以外に在つても、例へば承久役や蒙古来の時などにも愛国的の和歌が詠まれたが、残念なことにはその量甚だ乏しかつた。又元禄国学復興以来、多くの学者や歌人によつて愛国の歌が作られたけれども、それは百数十年の間に亘つて、ぽつ〳〵と現はれたもので、集団を成すといふほど著明では無かつた。

川田順の愛国歌研究は吉野朝や幕末といった、時代限定的な性質のものではなく、通史的に概観する視点を持ち得たのである。愛国歌が盛んに詠まれた時期を五つあげて、後続の文章でそれぞれの時代や歌人の特徴について簡潔にまとめている。川田の愛国歌史の特徴は明治以降の歌をも対象としたことであると言ってよい。つまり、現存歌人を収録することも厭わなかったのである。このことは意味深長である。すなわち、「現在」と地続きで愛国歌の歴史を構想しているからである。換言すれば、当時が愛国歌を詠むべき時代であるという認識があってはじめて成り立つからである。川田の愛国歌研究が時局の産物であるということをここから見て取ることができる。誰からも指示されたわけではないはずだが、愛国歌は時代の要請により成されたということだ。

日本が太平洋戦争（大東亜戦争）に突入して、愛国歌はすます時局の要請するところとなる。川田版『愛国百人一首』とは別に、「愛国百人一首」を公的に選定することになったのである。(注5)『愛国百人一首』は日本文学報国会が情報局と大政翼賛会の後援のもと、毎日新聞社の協力により編んだもので、一九四二年十一月二十日に各新聞に発表された。選定委員は佐佐木信綱・斎藤茂吉・北原白秋（途中で没）・太田水穂・尾上柴舟・窪田空穂・折口信夫・吉植庄亮・川田順・斎藤瀏・土屋文明・松村英一の十二名である。川田自身も選定のメンバーに名を連ねているが、公的に

選ばれる百人一首とはおのずと基準も異なる。詳細に定められた「選定方針の要項」によれば、最初の項目に「万葉集以降幕末までの歌の中より選ぶこと」とあることが最も大きい。とりわけ、「幕末に作られた歌でも、作者が明治改元以後まで生存したならば採らぬこと」という条件が付けられたのである。これは明らかに採録時と詠歌時との隔絶を意味する。それは川田の愛国歌観と異なるものであった。

愛国歌研究が現在と地続きであるという意識の延長線上で、川田自身も愛国歌を詠んだ。それは「戦争短歌」と称する連作の三部作として集成された。一九四一年十二月十二日の開戦から翌年十二月十二日の伊勢行幸までを詠んだもので、第一篇『史歌太平洋戦』は一九四二年三月、第二篇『史歌熱帯作戦』は同年八月、第三篇『史歌南北作戦』は翌年四月にそれぞれ刊行されている。一九四四年十一月には、この三篇よりその精髄を抄出して『史歌大東亜戦』を編み、これを上梓した。戦局が苛烈きわまる時期に、緒戦の感激を新たにしたいという意図が序に記されている。また、巻末には「戦争短歌への態度」という文章を付して、自らの戦争短歌観を披露している。その末尾には次のような文章を置いて、この小論を締めくくっている。

予の戦争短歌は、宣戦大詔を拝承したと同時に著手せられ、「大東亜戦争を歌ひ挙げ度い」といふ一貫した念願及び意欲の下に作られたものである。依而、強弱如何に関はらず、おのづから構造を持つてゐる。単に感興に応じて断続的に詠まれた断片的時局歌の堆積とは、理念を異にしてゐる。

川田は作歌の一貫性ということにこだわっているごとくである。それは自身の歌を「断続的」「断片的」な「時局歌」と一線を画していることからも明らかである。歌によって戦争を総体として描こうとしたのだ。それは歌集の題に「史歌」を冠することと軌を一にしていると言ってよい。歌によって綴られた「戦史」である。そういった意味で、

川田の「戦争短歌」は筋金入りであった。川田の愛国歌研究が現状と地続きであったのは、そういう背景があったのである。善悪の議論を別にすれば、ここには和歌の研究と実作とが理想的に融合している姿を見ることができる。

さて、公選の『愛国百人一首』に川田は注釈を加え、『愛国百人一首評釈』（朝日新聞社、一九四三年五月）として刊行する。そこに「愛国歌史」を添えた。これは二年前に公表した「愛国歌概説」を増補訂正したものである。そこには先ほど引用した五期について、修正を加えている。一つは「三、幕末時代」であり、もう一つは「五、支那事変下の現在」である。後者は「支那事変以降大東亜戦争下の現在」と改変しているが、これは日米開戦後の現状を反映したものであり、軽微な変更と言えよう。問題は前者である。「愛国歌史」では、「三、幕末時代」は次のようになっているのである。

三、江戸時代

イ、元禄以降皇学者歌人の歌

ロ、幕末志士の歌

これは江戸時代を細分化したわけではない。川田の愛国歌観が変容したのである。というのも、「愛国歌概説」には「元禄国学復興以来」の「多くの学者や歌人」は「集団を成すといふほど著明では無かつた」と記していたからである。ところが、「愛国歌史」においては第三期に江戸時代を設定し、そこに下位分類を設けることになったのである。それは公選の「愛国百人一首」の中の国学者歌人の占める割合が高かったということも一因と考えられるが、それ以上に川田の愛国歌観が変容したと考えるのが妥当であろう。「幕末志士の歌」は突然出てきたのではなく、「元禄以降」の「皇学者」（国学者）の歌があってはじめて登場したととらえたのである。要するに、「幕末志士の歌」は詠ま

れるにふさわしい歴史的必然性があったということである。

そのような愛国歌史の枠組みの中で、「幕末志士の歌」はどのように位置付けられるのか。川田はこれを次のように要約している。

幕末志士の愛国歌は非常の数に上り、作者も社会の上下各層、各職域に亘り、詠風にも古体あり、近風あり、口語体類似のものさへあり、実に千差万別と云つても宜しいが、歌つたところの内容は、尊皇・斥覇・攘夷の三範疇に大別出来るとおもふ。玄人に伍して遜色なき歌人的素質の志士も十指に余ると思ふけれども、大多数は勿論この道の素人であつた。素人であり乍ら、千歳の後までも不朽と目せられる歌を数多作つたところに、この時代の特色（万葉集に似通へる）あり、和歌といふものの本質をあらためて考へさせる事にもなる。国史の上からも、日本精神史の上からも、一般文化史の上からも、乃至、和歌史の上からも、これら志士の作は深き関心をもつて研究せられねばならぬ性質のものだ。蕪雑生硬の文学なりと一知半解的に片付けるなどは、冒瀆の沙汰であらねばならぬ。

志士の歌について、歌人は尊卑の各階層にわたり、歌風は種々雑多であるが、歌の内容は尊皇・斥覇・攘夷に大別できるという。このように志士の歌を分類するのであるが、川田には一点だけ引っ掛かるところがある。それは素人が多いということであった。だが、それも万葉時代とのアナロジーによって理解できるとしている。川田はすでに『幕末愛国歌』の序において次のように述べている。

志士吟詠は純文学に値するや。従来は否定に傾く説の方が多かつた。乍併、私は検討の結果、ためらはずして肯定説をとるに至つた。作者及び対象多種多彩にして、表現の現実的なる、これを誇張せば、万葉集に類する所あ

りと言つて謬らない。吉野朝の悲歌に比べて遜色あらば、宗良親王の如き偉大なる一作家を見出し得ない事のみである。

志士の吟詠は十分に文学研究の対象に成り得る、というのである。それは万葉集に類するものであり、著名歌人の存在の有無を別にすれば、吉野朝の悲歌にも引けを取らないものであった。

川田自身も繰り返し自問自答しているところからすれば、志士の歌は無条件で文学研究の対象となるものではないと考えたのであろう。しかも、それまでは文学史に記載されることもなかったのである。それが時局を反映してようやく文学史上に位置付けられるようになった。川田の一連の愛国歌研究はその魁だったのである。

なお、川田は一九四四年一月に『吉野朝の悲歌』・『戦国時代和歌集』・『幕末愛国歌』三部作に対して朝日文化賞を受けている。体系的な和歌研究という面もさることながら、愛国歌研究が表彰される時代であったということである。

四、勤皇歌研究流行の魁

川田順が一連の愛国歌研究の第一弾として『吉野朝の悲歌』を上梓した一九三八年に、勤皇志士の詩歌の研究書が出版された。小泉苳三『維新志士勤王詩歌評釈』（立命館出版部、一九三八年五月）がそれである。小泉苳三（一八九四～一九五六）は東洋大学国文科出身の近代短歌の研究者で、尾上柴舟に師事して歌も詠んだ。立命館大学や関西学院大学の教授を歴任し、近代短歌研究に業績を残した。その小泉が幕末維新の志士の作った詩歌の研究に足を踏み入れた

のは、そこに近代短歌の黎明を見たからであった。

小泉は『勤王詩歌評釈』に「維新勤王志士歌研究」と「維新勤王志士詩歌集解題」を付している。前者の研究において、小泉は志士の歌四十五首を取り上げ、その特徴を解説している。その末尾は次のような文章で締めくくられている。

維新勤王志士歌に於ける現実主義的傾向は、明治前半期の「万葉調による民間歌人」につゞく。丸山作楽、与謝野礼厳はともに維新に際して国事に奔走した人々であつた。作楽礼厳の影響をうけたものに天田愚庵、福本日南がある。与謝野鉄幹は礼厳の子である。正岡子規は愚庵から少からず影響されてゐると見ることができる。いへば、それは、さらに、明治中期に於ける和歌革新者たる鉄幹子規にまで展開してゐるのである。こゝに近代和歌史に於ける維新勤王志士歌の意義が存する。

志士歌は明治前半期の歌につながる性質のものであるという。それは正岡子規や与謝野鉄幹という、近代短歌を代表する歌人に架橋するものである、というのが小泉の認識である。つまり、本書において小泉は「維新勤王志士歌」を和歌史上に位置付け、近代短歌を先取りする表現傾向を有する歌として把握しているわけである。この認識は小泉がそれまでにおこなって来た近代短歌研究の延長線上にあり、必ずしも突然思い付かれたものではなかった。というのも、この論文の初出は『近世文学の研究』（至文堂、一九三六年一一月）であり、これを転載したものだったのである。当該書は藤村博士功績記念会の編で上梓された書籍であって、純然たる個別研究書であった。それゆえ、この論文が執筆されたのは小泉の研究対象の問題であって、本人の関心に従ったものであると言うべきであろう。

しかしながら、本書『勤王詩歌評釈』は「陸軍省推奨」として出版されたものであった。そして、そのことは本の

表紙にはっきりと刻印されている。だから、小泉の研究歴とは別に企画されたということになる。川田順『吉野朝の悲歌』がそうであったように、日中戦争が影を落としているのである。序には時局的言辞はないが、評釈本文のところどころに時局への言及が見られるのである。たとえば、大神繁興の歌の評釈には「現に明治維新七十周年の今日、維新志士の精神は、脈々として再び高く波打つて来つゝあるのである」と記している。明治維新七十周年は一九三八年に当たる。「高く波打つて」いる「維新志士の精神」は日中戦争に向けられるべきものと言ってよかろう。また、瀬口三兵衛の歌の評釈にはもっと直接的な言葉が並んでいる。

地下にある作者の霊も、今やわが邦が東亜の安定勢力として、世界の平和と、東西文化の融和に貢献せんとしつゝあるを見ては、莞爾たるものがあるであらう。

「東亜の安定勢力」とは戦局へのオマージュである。そして、それは同時に泉下の英霊に対する慰撫でもあった。かくして小泉の志士詩歌評釈は時局に照応する内容であった。

本書は著者の認識をはるかに越えて販売部数を伸ばした。一九三八年十一月には「戦時体制版」として十刷を発行し、「戦時廉価版」として二円から一円二十銭に値下げされている。さらに一二月の段階で十二刷まで記録している。そして、それは陸軍省の意図通りであっただろう。同月には重版となり、著者の「重版の序」が付されることとなった。全文引用しよう。

北支那に中支那に南支那に、戦場にある将兵の作へた詩歌は短歌だけでも、すでに五万首を超え作者の数は略三千人に達してゐる。

わたくしは今、朔風荒む北支の野にあつて、これら将兵の進撃したあとを、ぢかに眼に見つつある。そして、

明治維新志士の詩歌と、今次の事変がうんだ詩歌、さらに万葉集以来の詩歌とをつらぬくものに思ひいたつてゐる。

小泉は「陸軍省嘱託」と「従軍歌人」という二つの肩書きを得ている。この序文はその立場で書かれたものである。ここでは、「志士の詩歌」を「今次の事変がうんだ詩歌」につなげ、さらに万葉集にまでさかのぼる構想が披瀝されているのである。この認識は元からあったものではなく、小泉が従軍歌人として戦場に出て実感したものと考えられる。はじめは個人の研究であったはずが、否応なく時局に巻き込まれていったのである。そして、本書は別の意図を持つようになった。

重版の序に続いて、立命館初代総長の中川小十郎が序（昭和十四年一月）を寄せている。そこでも、今次の事変と幕末維新を重ね合わせて、国家の一大事を論じている。次の如くである。

今回の日支事変を契機として再び著しく昂揚された挺身奉公の観念は、取りも直さず明治維新に於ける幾多志士の真精神を承継するものである。今日、国内に滂薄する我等臣子本分の姿に直面するとき、何人と雖も我帝室に対し奉り、限りなき忠誠の念と、又同胞に対する深い敬愛とを禁じ得ないのである。明治維新の大業は皇政の復古に向つて驀進することであつたが、今日の事業は更に東洋の天地に於て新世界を創造すべき皇謨の恢弘であつて、その難事たること前者と同日の論でない。

幕末維新と「今回の日支事変」を結び付ける観点は小泉と同様であるが、「今回の事業」に掛ける思いの並々でないことが記されている。その思いは本書を無料配布するという決断を促すこととなった。中川は次の文章で序文を締めくくっている。

私は全国の傷痍将士諸君に向つて、我学園全員の感謝の誠意を捧げんがために、茲に本書一本を各位の坐右に贈呈する。維新志士の詩歌に横溢する精神と気魄の純なるものが、傷痍将士諸君の同情同感を惹起し、その詩歌を介して、更に崇高なる臣民誠忠の自覚にまで進み行かれんことこそ、私のひそかに希ふ所である。

本書を「傷痍将士諸君」に贈呈されることにしたというのである。そして、志半ばで昇天した維新志士の精神を、その詩歌の中から汲み取って「更に崇高なる臣民誠忠の自覚」を獲得してほしいと述べている。実際のところ、本書重版はそのために発行されたものであり、表紙見返しには「傷痍将士諸君 立命館贈呈」の文言が赤字で印刷されている。また、初版の裏表紙に刻印された定価（¥1・20）は、重版においては存在しない。要するに、重版は傷痍将士に贈呈されるためにのみ刊行されたということである。

幕末勤皇歌研究流行の魁となった、小泉苳三『勤王詩歌評釈』は以上のような経緯で時局と深く関わることになった。(注6)

五、高野辰之の「志士文学」論

川田順は幕末志士の歌が文学研究の対象にふさわしいかどうか、という問題に執拗にこだわる。『幕末愛国歌』末尾に付された「幕末愛国歌総論」においても繰り返す。従来の否定的な説を紹介した上で、敢然とこれに反論している。次の通りである。

乍併、かやうの否定説は不深切であり、同時に、文学論としても誤つてゐる。たとひ拙劣なる歌が随時随所に詠

まれたとするも、時として、人間の赤心に触れ、不朽を値する作は無いと云へぬのである。如何なる時代に在つても、珠玉は沙礫の量の一小部分に過ぎない。沙礫堆中に珠玉の光を発見する事が、批評家の役目ではないか。況んや、幕末志士の吟は、たとひ一断片と雖も、彼等の心血をしぼつて吐露されたものである。王朝時代の花鳥風月詠とは、撰を異にする。私は、高野辰之博士の「江戸文学史」下巻を披き、特に志士文学の一章を設けて紹介し、論述せるを見、巻中例示せる作品の当否に就いては愚説あるも、博士の学問的態度には全然賛同せざるを得なかつた。

川田の論点は二つである。一つ目は、時代を問わず優れた文学作品は一部に過ぎないこと。二つ目は詠まれた内容が「心血」の「吐露されたもの」であること。つまり、傑作が少ないからといって、総体を否定するのは当たらないというのである。注目すべきは、末尾に高野辰之著『江戸文学史』に言及しているところである。高野が文学史の中に「志士文学」の一章を設けて論じていることに共感し、賛辞を述べているのである。最強の援軍を得た思いであったであろう。(注7)

高野辰之とは何者か。高野は一八七六年に長野県に生まれた国文学者で、東京音楽学校（後の東京芸術大学）等の教授を務めた。長野師範学校卒業後に小学校教員をした後、上京して東京帝国大学の上田万年のもとで研究を続け、『日本歌謡史』等の実証研究を発表した。文部省の国定国語読本の編纂に携わったことが広く知られているが、最近では「古郷」「紅葉」「朧月夜」といった文部省唱歌を作詞した人物として知られるようになった。(注8) そういう経歴の高野に東京堂刊行の『日本文学全史』の江戸時代篇執筆の白羽の矢が立ったのは、一九三四年九月のことだった。『日本文学全史』は佐佐木信綱（上代文学史）・五十嵐力（平安朝文学史）・吉澤義則（鎌倉・室町文学史）・木間久雄

（明治文学史）に高野（江戸文学史）を配置する布陣である。ほかの時代が上下二巻構成であるのに対して、江戸時代が上中下の三巻構成であるのは当時の文学史観がほの見える気もする。ともあれ、高野は『日本文学全史』第九巻『江戸文学史』下巻（一九三八年六月刊）に第五編「文政天保以降」の第五章に「志士文学」の項目を立てて、堂々と江戸文学史上に幕末志士の文業を組み込んだのである。川田順がこれを見て敬服したのは前に見た通りである。

高野が文学史の上に「志士文学」を位置付けたことについて、高野は自身の文学史観であると表明している。大尾にあたる第六章「結語」において、次のように記している。

最後に志士文学の一項を設け、それに七十余頁を費し得たことは積年所思の一端を実行したもので、心竊に欣快とする所である。

高野にとって「志士文学」は「積年所思」だったというのである。足掛け五年という執筆期間において、最後に「志士文学」を置くことにはそれなりの感慨があったであろう。それは単に大業を擱筆したという達成感だけではない。極端に言えば、文学史を書き替えるという意気込みがあったと思われる。高野は「志士文学」を取り上げる意義について、次のように述べているのである。

志士は必ずしも文筆に長じてゐなかつた。ただそれに長じてゐた者の詩文和歌絵画ばかりが喧伝された。これもまた止むを得ない事由であつた。幸にして明治元年に殉難前章・殉難後草・唱和集が刊行せられ、翌二年に殉難遺草・殉難拾遺が出版せられて志士吟詠の散佚が防がれた。さうして年と共に殉難士伝の研究調査が行はれ、其遺墨も尊重せられて、人口に膾炙せられる詩歌も多く、それには文筆専門の士もあり、それで無くても、熱情の高調を示して人を感動せしめる作が少くない。従来の文学史家は之を度外視して、わづかに歌人の志士でもあれ

ば、それに言及するといふ程度であつた。私は邦人の漢詩文をも展望視するといふ立場よりして、到底これに眸を向けずには居られない。よつて特に此一項を設けて、志士の作二三づつを挙げるであらう。

志士の文業が総体として注目されることがなかった理由を端的に記している。要するに「文筆に長じてゐなかつた」からである。だが、遺筆や作品自体は盛んに収集され、その内容が吟味に堪えるものであることがわかっている。さらに「邦人の漢詩文」を展望するという観点からも志士の文業を見渡す必要があるというのである。この点は川田順と異なるところである。川田は歌人研究、和歌研究の立場に立ち、幕末志士の文業を愛国歌という観点から展望した。これに対して高野は和歌に漢詩文を加えた上で文学史に位置付けるというのである。ジャンルを横断する高野の認識は、厳密に言えば川田の文学史観とは異なるが、川田自身も共感を寄せているように、大局的に見れば同じである。つまり、志士の文業への熱視線という点において、関心を共有していると言ってよかろう。

ところで、高野は「志士文学」を「積年所思」と述べているが、その論調や取り上げる作品などは、やはり時局の影響を免れているとは言いがたい。実際のところ、高野自身も次のように告白しているからである。

志士の多くは武技を研き、憂国の至誠によつて起つたもので、必ずしも詩歌文章の士でない。通じては中層の士分が多く、此人たちは漢文学を第一に学んでゐたので、其遺詠には漢詩が多く、和歌は却つて少い。此等志士にも風月の興を詠じた詩歌は無いのではないが、人口に膾炙するもの即ち人心を支配したものはそれよりももつと刺激的なものであつた。随つて、こゝに掲げたものは尽忠報国文学・憂憤慷慨文学・離別文学・辞世文学に傾くを免れなかつた。時は恰も日支大事変当時である。私は此時に此章を起草したので、自ら非頽廃・非糜爛・非偸安を期して正襟文字を多く載せたことであらう。（尾言）

志士は「中層の士分」という階級により漢文学に長じていたので、漢詩文が多かった。また、読者の心に刻印されたものを中心に収集したので、その内容は「尽忠報国」・「憂憤慷慨」・「離別」・「辞世」といったものになる傾向があったという。もちろん、そのような元来、志士文学が持っている属性によるところもあるが、高野の執筆時期も収録内容に関係しているというのである。すなわち「日支大事変当時」という時節である。川田順の『吉野朝の悲歌』執筆の動機も日中戦争（支那事変）勃発ということが影を落としていた。高野辰之の「志士文学」観は、明らかに川田の愛国歌研究とともに日中戦争という時局に共振している。

このように高野の『江戸文学史』には、その末尾に「志士文学」が置かれたが、それは特別な意味を持った。高野にとって積年の思いの実現であると同時に、時代の要請でもあった。その証拠として、「志士文学」は四年の歳月を経て、増補され単行本として出版されることになったのである。『志士文学』（東京堂、一九四二年七月）がそれである。序には次のような文章がある。

曩に中華民国政府は帝国の真意を解せず妄りに事を構ふるや、米英両国は之を誘ひて東洋の禍根を助長した。而して毫も交譲の精神を有せず、帝国の周辺に武備を増強して挑戦の態度に出で、帝国の存立を危殆ならしめようとした。　今上天皇は為に止むを得ずして両国に対して戦を宣せられた。御稜威の下、連戦連捷、我が国自衛の道は確立不動の域に達して、世はまさに昭和維新の大御代に入らうとしてゐる。

排外の勇ましい文言が躍っている。大情況として当時の日本が直面した国際情勢を語っているのである。時すでに太平洋戦争に突入していた。「昭和維新の大御代」は、当然ながら幕末志士が招来した「明治維新の大御代」に基づいている。『志士文学』が独立して刊行される意味がここにあると言ってよい。この序文の日付は「昭和十七年七月七

日」となっており、日中戦争のきっかけとなった盧溝橋事件が勃発した日付であった。この日付の一致は偶然ではない。高野にとって、「志士文学」というテーマが日中戦争と切っても切れない関係であることを示しているのである。

さて、『江戸文学史』所収「志士文学」から単行本『志士文学』への変容について考えてみたい。対照表に示したように、基本的な構成は両書で変わりはない。先憂三士（寛政の三奇人）を皮切りにして、勃発した出来事を時系列に整序し、それに関わる代表的人物の詩歌を摘出するというスタイルである。扱う詩歌に異同があることや単行本の方が詩歌の解説が丁寧であるといったことのほかに、両書には目立った相違点が二つある。それは①単行本の構成が事件に即した項目立てとなっていることと、②単行本では大政奉還以後も扱われること、の二つである。

一つ目として、同じ人物を取り上げたものでも、『江戸文学史』における章題と『志士文学』の章題が異なるということである。たとえば、『江戸文学史』では有馬新七を扱った「一〇　薩藩の過激派」と藤田小四郎を取り上げた「一四　水戸の内訌」は、藩内の権力闘争という視点から題が付されている。ところが、『志士文学』において、前者は「一二　寺田屋の変」とし、後者は「一三　筑波山挙兵」として、歴史上の事件（出来事）という観点から題を付しているのである。このことは『志士文学』が幕末維新という歴史の筋の中で志士の文学を把握しているということを意味する。それは単なる文学史の中の一章に過ぎなかったものが、まとまった単行書にするための趣向であったと考えることができるだろう。

二つ目として、『志士文学』では大政奉還以後が扱われているということがあげられる。それは「一九　聖代金声」と「二〇　志士玉振」の二章である。題にある「金声」と「玉振」は『孟子』「万章」篇下の故事を踏まえている。そこでは、孔子が「智」と「聖」とを兼ね備えていることを述べるくだりで、「集大成」という用語を説明している。

「志士文学」対照表

『江戸文学史』下巻「志士文学」		『志士文学』	
意義・範囲	一	序説	一
先憂三士	二	先憂三士	二
頼山陽	三	防備先覚	三
防備先覚	四	攘夷論の巨頭	四
安政の大獄	五	頼山陽の感化	五
桜田門事変	六	戊午の大獄	六
坂下門の襲撃	七	桜田事変	七
幕末の紛擾	八	坂下門外事変	八
長藩の攘夷論者	九	幕末の紛擾	九
薩藩の過激派	一〇	天忠組及び生野事変	一〇
公家の雄傑	一一	八月十八日の大政変	一一
天忠組の挙兵	一二	寺田屋の変	一二
生野の義挙	一三	筑波山挙兵	一三
水戸の内訌	一四	池田屋襲撃	一四
禁門の変・長州征伐	一五	禁門の変	一五
土佐志士の活躍・大政奉還	一六	長州征伐	一六
尾言	一七	土佐藩の活動	一七
		大政奉還	一八
		聖代金声	一九
		志士玉振	二〇

すなわち、鐘を鳴らす奏楽の始まり（金声）と玉器の打音で整える奏楽の終わり（玉振）の両方が完全に備わっているというのである。そこに「金声とは条理を始むること、玉振とは条理を終うることにして、条理を始むるは智の事、条理を終うるは聖の事なり」と記されている。要するに「聖代金声」とは明治維新になって天皇親政となることを意味し、「志士玉振」とは幕末志士が徳川幕府を終わらせたことを意味する。そこには理想的な政治体制の幕開けのドラマを志士文学に見る観点がうかがえる。

そして、それは単に明治維新の始まりだけを意味するものではなかった。志士によって著された詩歌は、『志士文学』が刊行された時局を先取りするものとして解釈されることになったのである。たとえば、「一九　聖代金声」に鍋島閑叟の「偶成」詩が収録されている。七言絶句の当該詩は、幕末において西洋諸国が日本を侵略しようものなら、日本刀にて一刀両断にしてみせよう、といった内容である。そこには次のような解説文が添えられている。

嘉永安政以降欧米がわが辺要を窺つて、不当の注文を我に向つて出し続けて来たのである。去る十二月八日断然大詔勅が発布せられて何十年来の恨がだん〳〵日本刀に膏せしめられてゐる。これも常に新しい詩であつた。少くともハワイ戦捷、南島が手に入るまでは新しい詩であつたのである。

「十二月八日」とは一九四一年の十二月八日のことである。この日は言うまでもなく、米英に対する宣戦布告と真珠湾攻撃をした日である。開国を迫って黒船が来航した幕末と太平洋戦争の戦時下の日本が完全に二重写しにされている。つまり、時空を超えて幕末詩歌が戦時によみがえったということだ。増補された章段における時局発言は一再ではない。先ほど序における時局発言を確認したが、時局に照応するのは序文だけではなく、著述内容もそうなのである。いや、著述内容こそ時局が必要としたものであった。「志士文学」が『江戸文学史』の中から独立し、装いを新

たにして単行出版された理由がここにあったと言ってよかろう。

六、横溢する勤皇歌研究

川田順が先鞭を付け、高野辰之が江戸文学史に位置付けた幕末志士文学への関心は、太平洋戦争への突入とともにますます盛んになる。ここでは代表的なものを取り上げて検討したい。

まず、藤田徳太郎（一九〇一～四五）は一九四二年十二月に小学館より『志士詩歌集』を刊行する。埼玉高校教授であった藤田は、もともとは歌謡を専門として研究を始めたが、昭和十年代には国学について旺盛に研究、執筆活動を展開した。[注9] 本書はそういった関心の延長線上に位置する研究対象であると言ってよい。本書は維新の志士の詩歌を収録した『歎涕和歌集』四冊と『殉難全集』五冊を収載し、翻刻解説した。所収の二作品については二節で触れたように、幕末の同時代に出版された志士詩歌集である。それをこの時代に刊行する意義を藤田は次のように述べている。

今や大東亜戦争において、大東亜の建設が、御稜威のもと、赫々たる皇軍の大捷に輝くとき、わが国の懸命必至の大使命となつた。この際、一億国民のすべてが、維新志士と同じ魂、同じ精神の上に立つて、これをなし遂げなければならないのである。この精神を養ふには、志士の伝記に接し、更に、志士の衷心の詠懐に触れてその心をわが心とするのが、最上の道である。本書を編纂する趣旨も、その点にあるが、あへて、一々の詩歌に註解を加へるまでもなく味読三賞、おのづからにしてその生命に徹し、その精神に通じるものがあることを信じる。か

くて、すべての国民が、尊皇攘夷の大義と、一面、国家推進の力に生きた忠烈の士に学んで、現代の大東亜戦争の必勝を期することが、何よりも望ましいのである。

「大東亜戦争」期における「尊皇攘夷の大義」は「維新志士」の魂に通じるというのである。それゆえ、志士の伝記や詩歌に触れることが、この難局を乗り切る「最上の道」であると藤田は強く信じているのである。

この『志士詩歌集』には計画段階で収録される予定のものがあった。『近世殉国一人一首伝』四冊である。これに『近世報国志士小伝』一冊と『振気篇』三部八冊を取り合わせて、『維新志士回天詩歌集』（金鈴社、一九四四年七月）を編纂する。藤田にとっては志士詩歌集の第二弾であり、姉妹編であった。当該書の序には次のようにある。

この書には、主として、志士の小伝の相当詳密にして、且つ、幕末明治の維新の経過に関し、勤皇諸家の人物と、歴史の事件に、可成りの理解を得るがごとき書を選び収めたれば、伝記によりて、その概略を知り、詩歌文章によりて、その精神を体得し、遂にその志を継承して、今日の大みいくさに戦ふ、み民われの自覚に到達し、臣民の行ひに遺憾あることなからしむるを得れば、亦、本書によりて、遺著を顕はさんとしたる微衷も、空しからず、世道人心に与ふる補益、必ずしも些少にはあらざるべきを信ず。

志士の伝記が詳細で、歴史上の事件をたどることができる詩歌集を選んだという。この詩歌集を読むことによって志士の精神を体得し、そのことが今時の戦争のためになると主張するのである。「み民われの自覚」とは、当時もてはやされた「御民われ生けるしるしあり天地の栄ゆる時にあへらく思へば」（万葉集・巻六・九九六）に基づいている。臣民として生まれ合わせたこの時代に感謝するという意である。この歌は国民学校初等科国語の教科書にも掲載された歌である。そこには「昭和の聖代に生をうけた私たちは、この歌を口ずさんで、更に新しい喜びを感じるのであり

ます」という解説が記されている。[注10] この歌を踏まえて戦局に立ち向かうという共通了解が存在したごとくである。要するに、この『維新志士回天詩歌集』の認識は万葉時代と幕末維新と戦時の当代とを一体のものとしてとらえ、帝の大御代を生きるためのすべを悟るために著されたということになるだろう。

古代はともあれ、幕末維新期は歴史上の事件について、志士の詩歌を通して見ることに意義があると藤田は考えている。幕末維新期のたどった道と現在との照応について、藤田は解説で明確に述べている。

今日、この歴史の跡を振り返るとき、同じ足踏みをしてはならない警告を感じるのであるが、それはとりも直さず、この重大な聖戦、大東亜戦争の結果が、明治維新の方向を文明開化の風潮が歪曲したのと、同じ方向に辿るやうなことがあつては、尊い血潮を皇国に捧げた数多の勇士の英霊に、甚だ相済まないことになる憂ひを、私は心の奥底に深く抱いてゐるからである。

藤田は明治維新以後に欧化主義が蔓延したことを反省し、これを現時点に適用して、間違った道を歩むことに警鐘を鳴らすのである。要するに、維新の精神に立ち帰って日本が正しい方向に向かうための道標にしようというわけである。幕末志士の詩歌を出版し、流布させるために、このような意図を裏付けとしていたのであった。藤田は自らの皇国主義と相俟って、こういった種類の書物を次々と出版したのである。

さて第二として、『勤皇志士詩歌集』が至文堂から出版されたのは、藤田の前著が刊行されてしばらく経った一九四三年七月のことだった。著者の黒岩一郎（一九一三～九五）は旧制姫路高校教授で近世和歌で専門とした。つまり、本書は専門家の著作ということになる。多くの詩歌集を用いて、発生した事件を時系列に並べ、これに関与した人物の詩歌を解釈するという構成である。藤田の著書と同様、幕末と時局との照応について、黒岩も序において明確

に述べている。

国の安危や将に決せんとしてゐる。昨日は山本元帥の戦死を聞き、今日はアツツ島の悲運を知つた。やはかこの仇討たでおくべきや。果せるかな山本元帥につゞけ、アツツ島の勇士に続けの雄叫びは期せずして国の内外にたぎりたつてゐる。元帥やアツツ島の勇士につゞくとは、とりも直さず幕末の志士達に続く事なのである。現代み民たる我々はこれらの志士の雄叫びを高誦することによつて、常に雄壮果敢の気を奮い起し、有史以来最大の聖戦を勝つて勝つて勝ち抜いて、これら幾多の志士達の英霊に手向けようではないか。

黒岩は時局を詳細に記している。それは山本五十六の戦死とアツツ島の玉砕である。この逆境を乗り越えるために、幕末の志士を見習わねばならないということだ。志半ばで果てた「志士達」の仇討ちこそ残された者の使命だというのである。ここには悲壮感がみなぎっている。それを糧として現状を乗り切ろうというわけである。

このような文言は当時の出版物の序文には多く見受けられるが、本書は単なる時局への挨拶ではなかった。内容と思想が深く連関しているのである。本書の末尾に次のように記されているからである。

時まさに国の非常の秋である。私達はこれら志士達の残していつた詩歌を、朝夕に朗誦することによつて志をふるひ起し、常に雄壮の気概を以て時艱に打ち向ひ、英米の撃滅に邁進しなければならない。そしてそれが本当の意味で志士の詩歌を真に愛することになるのだといふことを忘れないやうに。

過去の文学作品を読むことは、それを味わうことだけで終わればよいというものではない。そのようにして理解したことは実践に移さねばならない。志士の「雄壮な気概」は、眼前の「英米の撃滅」のためのものでなければならない、というのである。ここに本書刊行の本当の意味があった。

第三に、『歎涕和歌集』が岩波文庫より刊行されたのは一九四三年十一月である。すでにアンソロジーに組み込まれる機会に恵まれた同書が、単独の文庫本で出版されたのである。数ある志士詩歌集の中から本書が選ばれた理由は、編者の広田栄太郎（一九〇九～七四）によれば、「幕末の尊皇の志士の和歌のみを主として輯録してゐる」からであるという。解説には日本文学報国会版『愛国百人一首』への言及も多数見られるところからも、和歌への愛着の強さが感じられる。愛国歌という点でも次のような論述が見られる。

わが三千年の和歌史の上を、強く、太く、しかも燦かしく、貫き流れてゐるものは、尊皇殉国の精神であらう。万葉の忠君愛国の純情は、新葉集に系をひいて吉野の悲歌となり、更に時を隔てゝ幕末志士の慷慨歌に顕現し、降つては日支事変・大東亜戦争に於ける尽忠報国の歌に繋がつてゐる。

和歌史を「尊皇殉国の精神」から眺めた時、万葉集の「忠君愛国」、新葉集の「悲歌」、幕末志士の「慷慨歌」に続いて今時大戦の「尽忠報国の歌」へと続く一連の流れがあるという。これは三節で言及した川田順の愛国歌史観を踏襲するものである。[注11] それはともあれ、幕末志士の歌が「日支事変・大東亜戦争」という時局の中で把握されており、この時期に刊行されたのもそういった事情があったと考えることができよう。

この他にも幕末志士の詩歌を収録・解説した著書はあったが、それらは必ずしも文学研究者によるものではない。幕末志士の勤皇歌を文学史や和歌史の上に位置付けることを目指す本稿は、それらをすべて取り上げることは必要ないと考える。ただし、この時期にそれらの関係書の刊行部数が突出して多かったということだけは確認しておくことにしたい。

七、勤皇歌研究のその後

これまで見てきたように、幕末維新に活躍した志士が残した詩歌は同時代に出版されたが、文学史上に位置付けられたのは昭和時代になってからである。特に日中戦争勃発が一つの契機になり、太平洋戦争への突入がその動きを加速させた。戦局が苛酷になるに従って、幕末詩歌の解釈も悲壮感が漂い始める。天寿を全うすることなく、日本の夜明け前に絶命した志士の心情に重ね合わせるかのように、劣勢が漏れ伝えられる難局を乗り切る精神的支柱としてそれは機能した。あらかじめ敗北することを想定した上で、死に場所と死に行く大義とを得て滅びに向かって突き進む、いわば敗北主義である。自ら捨て石となって、大東亜の夜明けは近いと高唱した。

そういった八方塞がりの状況の中で敗戦を迎えた。敗戦およびその後のＧＨＱによる占領政策によって、ほとんどの価値観がひっくり返った。戦前・戦中に教学政策に関わった者たちの多くは公職追放の憂き目を見た。また、国威昂揚を目論んで刊行された書籍の多くが没収指定図書となった。(注12) 一九五〇年六月に朝鮮戦争が勃発したことにより、公職追放や教職追放は事実上無効となった。そして、一九五一年九月にサンフランシスコ講和条約が締結されて、公職追放は完全に解かれた。ようやく日本は独立したのである。そういった経緯の中で、勤皇歌研究はその後どうなったのか。

まず愛国歌研究に先鞭を付けた川田順は、敗戦直後に次のような歌を詠んでいる。(注13)

日の本の国民(くにたみ)として言はむすべせむすべ知らぬ今日の日に遇ふ

日の本の昨日と今日のへだたりは千年の如くおぼゆるものを

二首ともにある種の日本人が共有した思いを表現したもののようである。戦時中は相当数の愛国歌研究書を執筆したが、戦後川田はその方面の研究は取り立てておこなっていない。それよりも年の離れた女弟子との間のスキャンダルとその果ての自殺未遂によって、川田は記憶されることになった。[注14] 一九四八年十一月のことである。そのために皇太子の詠歌指南役を降りるということとなり、川田は歌壇の表舞台から退いたが、作歌執筆活動は継続した。

そういった中で『川田順全歌集』（中央公論社、一九五二年六月）を上梓する機会を得た。歌集を編纂する過程で、「戦争短歌」の扱いについて苦悩した。そのことを川田は「戦争歌を省みて」（『短歌研究』一九五二年八月）の中で告白している。まず、川田は戦時に詠まれた歌を総括して次のように述べている。[注15]

そもそも、あの頃に戦争歌を作つた動機は、人々によつて一様ならず、さまざまであつたらうと推察できる。あの戦争を不正な侵略と洞察して、戦争歌なるものを一首も作らなかつた良心的の人も、どこかに少々は居たことと思ふ。それは敬服に値するけれども、今日にして調べやうがあるまい。不正な戦争と否定して、堂々と反戦的の歌を発表した、積極的の人は一人も見当らない。これは、みづから信ずることを言ふに憚る卑怯なことと批難する識者が今日居るかも知れないが、それは「今日」である。あの当時に反戦的の歌を発表することは不可能であつたと云つていゝ。そんなことをすれば、首が飛ぶかも知れないのであつた。首を賭けて反戦することは、何千万人中の一人の殉教者にのみ求め得ることだ。それ故に、あの当時戦争を歌はず、黙つてゐたといふ消極的抗議だけでも充分に驚嘆して宜しいのである。

戦時中におこなった言動を戦後になってどのように評価するか、という問題は難しい。ましてや当事者であればなおさらである。それは引用文中の「今日」という言葉に端的に表れている。戦争協力か反戦かといった単純な二者択一

では解決できない問題である。一つ目には情報制限という側面があり、二つ目には洗脳という側面がある。さらに三つ目には法令遵守という側面がある。つまり、「不正な侵略」とは知らなかったということであり、大義のある聖戦だと思い込まされていたということであり、反戦歌を発表すれば処刑されたからである。このような説明は言い訳と受け取る向きもあるかもしれないが、おそらく川田にとっては実感を伴った心情の吐露であった。川田は「消極的抗議」もできなかったし、ましてや「殉教者」にはなれなかったのである。

しかしながら、川田は戦争歌を作り、戦争歌集を出版したことを良しとしたわけではない。むしろ、ある種の戦争歌が表現した内容について、慚愧の念を抱いたのである。そのことについて、川田は次のように述べている。

昭和十八年の中頃から軍部の欺瞞が漸く馬脚を露はし、心ある一部の識者達は、あの戦争の性格と結末とに疑問をいだき、不安を感じるやうになつたが、私は不安を感じつつも相変らず「負けてはならぬ」と歌つた。本土上陸の噂を聞いても引込まないで「敗兆」と題する歌を作つた。自分として、省みて最も悲しく、最も相すまぬと思ふのは、神風特攻隊を称揚したことであつた。その中には、

人の生はこれからと思ふ齢にてあはれ潔くも死にゆくかなや

馬の革に包むといふは昔にて還る屍もなきいくさなり

あはれこの若子が伴を死なせずて勝つすべもがと神に愬ふ

と悲しみつつも、純真な青年達を死地へ激励するやうな歌を作つた。私心なく、公けの為めと信じながらも、なんといふ無慚なことであつたらう。更に又、私は「吉野朝の悲歌」及び「幕末愛国歌」を著はして、日本の歴史に深く根ざす愛国心を唆つた。

川田は戦局が厳しくなり始めてから作った歌には、特に忸怩たる思いを抱くに至った。その中でもとりわけ「神風特攻隊」を称揚した三首を挙げて後悔している。全く無私の心から作った歌とはいえ、その「無慚」さを省みて「相すまぬ」という思いを激白するのである。

ここで問題なのは、その直後に『吉野朝の悲歌』と『幕末愛国歌』を挙げて、「愛国心を唆つた」と記していることである。さりげない書き方なのでわかりにくいが、「日本の歴史に深く根ざす愛国心」を論じた二書を著したことを悔いていると解釈することが許されよう。文頭の「更に又」という接続語は、特攻隊称揚の歌を作ったことよりも、さらに罪深いことに懺悔する思いがにじみ出ているからである。川田は戦時中の愛国歌研究を痛恨の極みと考えたのである。敗戦という現実が川田から愛国の情念を奪った。ことほど左様に、川田は変節したのである。

川田と同様、支那事変以来戦争短歌を作った小泉苳三は、やはり川田と同じく幕末勤皇歌の評釈を刊行した。むしろ、刊行は川田のものより早いくらいであった。一九四〇年五月には従軍歌集『山西前線』を刊行しているが、そのために戦後には教職を追われた。同歌集の巻軸の「東亜の民族ここに闘へりふたたびかかる戦なからしめ」という歌が「所謂支那事変は、東亜に再び戦なからしむる聖戦であるとの意味をもつ」という解釈によって不適格の烙印を押されたという。[注16]『現代短歌全集』第六巻（創元社、一九五二年十月）所収の小泉苳三作品集（自選）に付された、小泉本人による略伝の当該箇所は次の通りである。

支那事変には歌人として従軍、「山西前線」を著した。このため後に教職追放になつた。けだし短歌作品によつて追放となつた唯一人であらう。昨年九月に追放指定を解除された。

ほんの短い記述ではあるが、事実を述べただけではない、無念の思いを読み取ることができよう。小泉は教職追放の

指定が解除された後、一九五三年四月には関西学院大学に教授として招聘された。その後、一九五六年十一月に六十二歳で急逝するまでの間、大学の教壇に立ったが、再び幕末勤皇歌を研究することはなかったようである。大学に復帰した頃詠んだ歌に、「七年を真空状態に過したる歎かひは深く心に来たる」というものがある。小泉にとって教職追放の期間は真空地帯だったのであり、時間だけが無為に過ぎたというのが実感だったのであろう。この七年間の前後で心境の変化があったとしても不思議ではない。また、そのような心の動きを変節と呼ぶのが適切かどうか、判断を保留せざるを得ない。

次に、江戸文学史に「志士文学」を定位した高野辰之は、終戦後しばらく経った一九四七年一月に死去した。その後、『江戸文学史』を含む『日本文学全史』は新訂版として一九五二年十二月に刊行された。すでに高野自身は没していたために、息の正巳が序文「再刊にあたつて」を記している。そこには次のようなことが記されている。

父は今日のわれわれから見れば旧い型の人間で、どうひいき目に見ても所謂自由主義者ではなかつた。が、一生を学問のためにささげて他をかへりみず、従つて勲章をさげるために礼服を註文するやうな事はしなかつた。この点、愛されてよい性格だと信じてゐる。本書は日本が大陸侵略の準備中の所謂非常時と呼号されてゐた時代に執筆されたものである。併し、幸にして愛すべき父の性格のゆゑに、鼻につくやうな便乗的言辞はどこにも見出されない。本書の価値が戦前戦後を通じて少しも変りのない所以であらう。

正巳は旧版が執筆された「非常時」という時代背景に言及している。だが、本書には「鼻につくやうな便乗的言辞」がないことにも触れている。このことは戦後に出版する意義である。なるほど旧版には明らかな「便乗的言辞」は見えない。それゆえ新版を出すに際して書き改める必要はないといえる。新版の序文には、旧版に多数あった挿絵を省

略した旨が記されているが、それは出版社側の意向と専門書としての自負が合致したゆえの処置であり、必ずしも時局的言辞だからではない。しかしながら、全く旧版をそのまま出版することは躊躇われた箇所があった。それは「志士文学」の章である。新版の下巻第五編「文政天保期以降」には、第五章に旧版では存在した「志士文学」がきれいに削ぎ落とされており、「結語」が続いているのである。むろん、「結語」に存在した「志士文学」への言及も削除されている。

はたしてこのことをどのように理解すればよいだろうか。もちろん、「志士文学」はすでに単独で刊行されたから『江戸文学史』に収める必要がなくなったという解釈も不可能ではない。だが、たとえ一部分が単独で刊行されたとしても、文学史には全体としての整合性というものが必要とされる。したがって、そのために削除したとは考えられない。ましてや志士文学は高野本人の宿願であったごとくである。再刊に際して、そのような章段を簡単に削除するとは考えにくい。「志士文学」の章を削除したのは、やはり何らかの意図が働いたと考えるのが妥当であろう。それを追究するために、旧版と新版を全体として比較してみることにしたい。すると、興味深い事実が浮かび上がってくる。旧版に存在したにもかかわらず、新版には存在しないものが次の三項目である。(注17)

①第二編元禄期　第一章総敍　四徳川光圀の盛挙　「湊川建碑」

②第三編享保宝暦期　第一章総敍　第四節国学の興起　二春満の「創造国学校啓」

③第五編文政天保以降　第五章志士文学

この三つに共通するものは尊皇思想を鼓吹する文学作品であるということであろう。そして、そのことが戦後に削除された理由であると考えられる。そうであるとすれば、「志士文学」は戦時限定の文学ジャンルということになるだ

ろう。高野は時局に便乗する言辞は記さなかったけれども、扱った対象自体が時局迎合的なジャンルだったのである。「志士文学」が戦後削除されたことによって、逆にそのことがわかるのである。それはともあれ、著者の高野自身の意向ではないにせよ、「志士文学」が『江戸文学史』から削除されることによって、『江戸文学史』は変節したと言うことができよう。

第三として、藤田徳太郎について触れておこう。もともとは歌謡が専門であったが、戦時下には国学や勤皇文学の研究を盛んにおこなった。藤田は下関への帰省中に空襲に遭って行方不明になっていたようだが、次のような訃報が新聞に掲載された。

藤田徳太郎氏（埼玉高等学校教授）去る六月廿九日下関市の自宅に帰省中空襲に遭ひ行方不明となつてゐたが四日同家焼跡から死体となつて発見された。享年四十五、早大国文科出身、現在芸能文化聯絡審議会委員で「平安時代の庶民文学」「日本民謡論」「源氏物語の構成」等の著書がある。（「朝日新聞」一九四五年八月五日付朝刊二面）

残念ながら空襲に遭って死去していたのである。この記事が出たのは終戦の十日前のことであった。藤田は日本の敗戦を知らない。ましてや、戦後自身が糾弾の対象とされたことなど知るよしもない。[注18] もし藤田が敗戦を生き延びていたら、どのような後半生を送り、学界に対していかなる発言をしたか、興味深いところである。

そういった中で唯一の例外と言うべきなのが黒岩一郎である。戦時中『勤皇志士詩歌集』を上梓した黒岩は、戦後旧制姫路高校から神戸大学に転身し、教授を勤め上げた。近世和歌の研究を続け、『香川景樹の研究』（文教書院、一九五七年十月）で博士号の学位を取得したが、その少し前に『近世短歌』（有信堂、一九五四年四月）を出版してい

る。近世和歌史を五期に分け、それぞれの時期に詠まれた和歌作品と著された歌論を一体として把握する視座を打ち出している。その中で、第五章「幕末期」を置き、その第二節に「幕末の異色勤皇歌人群」を設定しているのである。そこで扱われる歌人は、佐久良東雄・伴林光平・平野国臣・野村望東の四人である。もちろん、この四人は『勤皇志士詩歌集』にも収録されている歌人であり、取り上げられている歌もほとんど共通している。近世和歌史の一項目であるゆえに『勤皇志士詩歌集』よりも規模が小さくなってはいるが、取り扱うスタンスは変わりがないということである。

このような歌人および歌の選択基準の共通点もさることながら、『近世短歌』当該節のはじめに書かれている内容だ。次のような文章である。

勤皇派歌人群、是こそ近世社会の特殊性が産んだ特異な歌人達である。一体近世中葉以降如何にして勤皇論が台頭し、それが如何なる役割を果して明治維新を将来せしめたかは此所で述べる必要はないが、近世中葉より幕末にかけて或は広く視野を世界に広げて開港論を称へた先憂具眼の士、或は外冦を憂へて攘夷討幕を唱へた所謂勤皇の志士達、或は亦身は幕閣の要路に立ちながらもただに一幕府のみならず国家百年の存亡の事を考へてゐた人々等々、そのよつて立つ所こそ異れ、真に国家の将来に思ひを致してゐた人々にはいづれも幾干（いくばく）かの詩歌がのこされてゐる。就中勤皇の志士と称せられてゐる人々の詠には幾多の名品が遺されてゐて、幕末歌壇に異彩を放つてゐるのである。所謂草莽の悲歌である。それは第二次世界大戦中の前線無名の将兵の珠玉の作品にも似てゐた。

幕末勤皇歌人についての概論である。「先憂具眼の士」・「勤皇の志士」・「幕閣の要」人など、立場はさまざまであり、

それぞれに「国家の将来」を憂えていたが、その中でも「勤皇の志士」がとりわけ注目に値する作品を残したという。それを黒岩は「草莽の悲歌」と称する。さらに黒岩はこれを「第二次世界大戦中の前線無名の将兵の珠玉の作品」になぞらえるのである。戦時の詩歌を幕末志士のそれとを結び付けるのは、戦時中に愛国歌研究をした川田順であったが、黒岩一郎もまた両者に類似点を見出したのである。両者の類比は、取りも直さず戦時中に幕末勤皇歌が流行した際の観点である。要するに、「国家の将来」に思いを馳せ、そのためには自らを犠牲にする心情という共通点である。『近世短歌』は戦後九年を経て刊行された書籍であるが、その精神と目指すところは『勤皇志士詩歌集』にほぼ重なる。黒岩一郎は敗戦をはさんで全く変節しなかったのである。

このように、戦時中に勤皇歌を研究した者の多くは戦後には勤皇歌から遠く離れた。しかしながら、勤皇歌から遠く離れたのは彼らだけではなかった。学界全体が幕末勤皇歌から遠ざかったのである。まず、戦後には勤皇歌を対象にした研究書や注釈書は一切刊行されていない。戦時中の書籍も全く復刊されていないのである。また、戦後に編集・刊行された日本文学史の叢書に幕末勤皇歌が章立てされたり、立項されたりするのは全くないわけではないが、極めて稀であった。(注19) これは研究者個人の志向の変化というよりも、学界全体が勤皇歌から距離を置いたことを意味する。詠まれた内容の当否を検討する以前に、勤皇歌を研究すること、それ自体が憚れるようになったのである。これは文化的変節と称してよかろう。戦後六十年を経て、近年ようやく個別の論文が生み出されるようになった。(注20) つまり、戦後六十年の間、幕末勤皇歌は文学史の海中に漂い、海底深く沈潜していたのである。

八、おわりに

和歌史研究において幕末勤皇歌が脚光を浴びたのは、日中戦争が始まる昭和十年代である。それは一連の愛国歌史の文脈であった。そこから志士文学が独立したジャンルとして認知されるに至り、勤皇の精神を体現した先達として認識されるようになった。日本が本格的に戦争に突入してからは、勤皇歌研究が相次いで公刊された。苛烈な戦局が伝えられるにしたがって、悲壮感を伴った解説が付されることになった。

そのような空気は一九四五年八月十五日をはさんで一変した。占領軍による統治が始まり、翌年には公職追放令（公職に関する就職禁止、退官、退職等に関する勅令）が発令されて、戦時中に力を持った指導者は職を追われた。戦時中に軍部が暴走したことや大本営が虚偽の発表をしたことが明らかになるに及んで、学界や言論界でも変節する者が多く出た。一九五二年に講和条約が締結され、公職追放令が解除されてから本格的に研究が再開した。しかしながら、幕末勤皇歌研究については、一部の例外を除いて再開することはなかった。それはあたかも「海中深く廃棄された放射性物質」（大岡信『保田與重郎ノート』）のように、今に至るまで引き上げられることはない。

本稿は一九三〇年代のディアスポラの研究でもないし、共産主義者の「転向」を扱っているわけでもない。むしろ、それとは正反対の範疇の事柄を対象としている。だが、政治体制が変化した時に受ける精神的影響は、思想の左右を問わない。一九三〇年代にはレッド・パージによって共産主義者の「転向」がおこなわれたというのであれば、一九四〇年代後半にはブラック・パージによって愛国主義者の「転向」がおこなわれたと言ってよい。それは思想的変節であり、文化的変節でもあった。

注

（1）幕末の尊皇思想の表記は「勤皇」と「勤王」の両方あるが、本稿では昭和十年代に一般的であった「勤皇」に統一した。

（2）久保田啓一『近世和歌集』（小学館、二〇〇二年）は近世期の和歌を総体として同時代的支持を集めた歌人によって構成した。拙稿「幕末の江戸歌壇―一枚刷『東都歌仙窓の枝折』をめぐって」（『国語と国文学』八十八巻五号、二〇一一年五月）は嘉永三年（一八五〇）における江戸歌壇の状況を分析した。

（3）拙著『村田春海の研究』（汲古書院、二〇〇〇年）および『江戸派の研究』（汲古書院、二〇一〇年）は主に未紹介資料を活用して江戸派歌人の実像を探ったものである。

（4）島内景二「「老いらくの恋」の純愛歌人は、愛国歌人だった」（川田順『愛国百人一首』解説、河出書房新社、二〇〇五年）は「川田順は昭和十六年十二月八日の開戦の詔勅を聞いて、にわかに愛国者になったのではなく、一貫した（根っからの）愛国者だった」と断じているが、その始まりは日中戦争にある。

（5）川田版と公撰の相違については、堤玄太「『愛国百人一首』を読む」（『和歌をひらく』第五巻『帝国の和歌』岩波書店、二〇〇六年六月）参照。

（6）『勤王詩歌評釈』が小泉の単著でないことは、後に白川静「芩三先生遺事」（『小泉芩三全歌集』、短歌新聞社、二〇〇四年）の中で述べている。ただし、刊行された当時には白川の名は一切出ていない。

（7）川田は『評釈日本歌集』（朝日新聞社、一九四一年十一月）「序」においても、「高野辰之博士著「江戸文学史」の中に特に志士文学の一章を設けて紹介し論述したのを見て、博士に敬意を表する」と記している。

（8）猪瀬直樹『唱歌誕生―ふるさとを創った男』（日本放送出版協会、一九九〇年六月）参照。

（9）拙著『本居宣長の大東亜戦争』（ぺりかん社、二〇〇九年）参照。

（10）『初等科国語』七（一九四三年）の「二十一　御民われ」。

（11）解説中に川田順『幕末愛国歌』への言及もあり、川田の一連の愛国歌研究を踏まえたと思われる記述もある。

（12）本稿で言及したものでは、小泉芩三『勤王詩歌評釈』と黒岩一郎『勤皇志士詩歌集』が没収指定図書にされている。

(13) 題は「八月十五日」。後掲『川田順全歌集』より引用した。
(14) 自殺未遂前後の心境については「不帰の境」(『財政』一九五五年四月)に記されている。また、事件の顛末についてはフィクションではあるが、辻井喬『虹の岬』が詳しい。
(15) 引用は『川田順遺稿集香魂』(甲鳥書房、一九六九年七月)による。
(16) 小泉の門弟にあたる白川静「小泉先生の不適格審査について」(『小泉苳三全歌集』、短歌新聞社、二〇〇四年)によれば、当時の教職追放は組織防衛のために大学内から一定数の通報者を出すために行われたものであったという。
(17) ただし、①「湊川建碑」については、目次に立項されるのみで、本文には該当する記述はない。
(18) 小田切秀雄「本居宣長等のこと、戦争責任のこと—戦争下から戦後、そして現在」(『日本文学』二十七巻十号、一九七八年十月)および近藤潤一「アカデミズムの戦中・戦後」(同上)参照。
(19) 『日本文学史』五巻『近世の文学(下)』(有斐閣、一九七七年三月)第十六章「幕末の文学」を執筆した前田愛は「志士の文学」を立項し、『日本文芸史—表現の流れ』第四巻・近世(河出書房新社、一九八八年四月)第四部「伝統の継承と異化」第三章「歌俳の現在」を担当した林達也は「述志の和歌」の項目を立てるが、たかだか十行程度の記述であった。
(20) 百川敬仁「勤皇志士和歌の史的位相」(『和歌をひらく』第五巻『帝国の和歌』岩波書店、二〇〇六年六月)や青山英正「振気から教化へ—勤王志士歌集のゆくへ」(『国語国文』七十五巻十号、二〇〇六年十月)など。

【付記】本稿は二〇一一年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「アジア・ディアスポラの転向体験—接触空間と植民地主義」(代表緒形康)の成果の一部であり、同・基盤研究(C)「本居宣長の国学の受容と国文学の成立に関する総合的研究」(代表田中康二)の成果を反映している。